

第17回 ITS 世界会議（釜山）



広安大橋

西部 陽右

ITS・新道路創生本部 調査役

1 はじめに

第17回 ITS 世界会議が、2010年10月25日（月）から29日（金）まで、韓国・釜山で開催されました。以下、会議の概要と当機構の活動などについて紹介します。

実施規模は参加国・地域数84、会議登録者数4,300人（うち日本から557人）、参加者数38,700人、展示会出展者数213団体（うち日本関連30団体）でした（いずれもITS Japan 調べ）。

2 会議の概要

- ・期間：2010年10月25日（月）～29日（金）
- ・会場：韓国・釜山市、釜山展示コンベンションセンター（BEXCO）
- ・テーマ：“Ubiquitous Society with ITS” 「ITSで築くユビキタス社会」



会場外観

表1 過去のITS 世界会議参加動向

	2004 名古屋	2005 サンフランシスコ	2006 ロンドン	2007 北京	2008 ニューヨーク	2009 ストックホルム	2010 釜山
参加国数	53ヶ国	55ヶ国	55ヶ国	46ヶ国	66ヶ国	64ヶ国	84ヶ国
会議 参加者数	5,794人	7,130人	約3,000人	約3,000人	8,000人	約2,801人	約4,300人
展示会 来場者数	61,394人		約7,000人	約40,000人		約6,250人	約38,700人
出展数	250団体	123団体	243団体	163団体	307団体	254団体	213団体

2-1 開会式

25日午後に開催された開会式では主催者代表である Chulho Lieu 組織委員長による開会宣言ののち、韓国政府代表の Jong - Hwan Chung 国土海洋大臣、開催地代表の Namsik Hur 釜山広域市長、およびアジア太平洋地域を代表して総務省総合通信基盤局・桜井俊局長、北米地域を代表して米国 RITA（運輸省研究・革新技術局）・Robert Bertini 副局長、および欧州地域を代表して欧州委員会 DG MOVE（モビリティ・運輸総局）・Fotis Karamitsos 局長がウェルカムスピーチを行いました。

また、今回、初の試みとして、ITS の発展に対する永年の功労をたたえる表彰が行われ、ITS Japan 名誉会長の 豊田章一郎氏、米国・Ygomi LLC 会長の Russel Shields 氏、およびさきにスピーチを行った EC・DG MOVE 局長の Fotis Karamitsos 氏が表彰されました。

なお、ITS 世界会議外のイベントではありますが、韓国政府・国土海洋部主催の「閣僚ラウンドテーブル」が開会式に先立って同一会場で開催され、参加者はそのまま ITS 世界会議のゲストとして招かれました。

2-2 プレナリーセッション

開会式翌日26日の午前、産官学のトップレベル級の登壇者が主に政策的な議論を行うプレナリーセッションが、PL I、PL II の2部構成で開催されました。

PL I では、“Integrated Goal for ITS Paradigm Shift - Safe, Convenient and Green Mobility” をテーマに、米国・Intel Architecture Group 副社長の Ton H. Steenman 氏の司会のもと、ITS China・Zhongze Wu 会長、ITS America・Ann Flemer 会長、および ERTICO の Gunter Zimmermeyer 会長が、安全、快適、環境の改善へ貢献する持続可能な交通システムを交通システムのネットワーク化により構築するための政策について議論を行いました。

また、PL II では、“Strategies for Ubiquitous Society with ITS - Ubiquity, Transparency, Trustability” をテーマに、米国・アイオワ大学教授の Hosin David Lee 氏の司会のもと、ITS Japan の渡邊会長、米国・Iteris Inc. President and CEO の Abbas Mohaddes 氏、

およびスウェーデン交通局上級顧問の Hans Rode 氏が、次世代の ITS に求められる3つの視点について議論を行いました。

2-3 セッション

ITS 世界会議の中心的行事であるセッションは、前記のプレナリーセッションを含め223セッションが開催されました。

セッションの全体的な傾向としては、モバイルサービスが日本以上に普及している韓国で開催されたこともあって、協調システム、持続可能な交通施策（環境問題）、実用化・実配備に向けた課題といった従来からのテーマに加え、携帯情報端末（ノマディック・デバイス）の利用や情報提供のネットワーク化等のテーマが多くみられました。

1) エグゼクティブセッション

ITS にかかる世界共通的なテーマについて、各国・地域の立場から政策や将来展望を紹介するセッションで、12セッションが開催され、幅広い分野にわたる技術論や政策論が発表されました。

2) スペシャルインタレストセッション

各地域の専門家が、研究あるいは実用化段階の個別の ITS 技術や施策について議論を行うセッションで、68セッションが開催されました。三極それぞれから ITS に関する特徴的なテーマについて発表が行われ、各地域が重点的に取り組んでいる ITS 分野について概観することができました。

3) テクニカル・サイエンティフィックペーパーセッション

一般論文発表である両セッションは132セッションが開催され、個別の ITS 技術や実用事例、あるいは ITS 施策についての最新情報が数多く発表されました。後述のインタラクティブセッションと合わせて総計1,169論文が応募され、査読審査を経た1,042論文が採択、1,037論文が発表されました。

4) メディアインタラクティブセッション

従来のいわゆるポスターセッションですが、釜山会議ではモニターに表示される発表資料の前で対話形式で質疑に応じる方式が採用され、9セッションが開催されました。

2-4 展示会、ショーケースおよび テクニカルビジット



開場式

韓国企業を中心に例年並みの出展があり、また、28日午後および29日を一般開放としたこともあり、全体としてはかなり賑わった印象を受けました。ITS Japan および当機構を含む19企業・団体は、日本全体としての統一感の演出を目的に、前回ストックホルム会議に引き続き統一ブース（Japan Pavilion）を構成し、出展しました。

26日のPL IとPL IIの間で行われた展示の開場式では、屋内でありながら、屋外で行われた3年前の北京大会の開場式を大きく上回る総勢40人以上が一斉にオープニングボタンを押すという、お国柄を大きく映したセレモニーが行われました。

日本からも、ITS Japanの坂内正夫副会長、東京都青少年・治安対策本部の伊東みどり担当部長が参列しました。また、これに引き続き、Japan Pavilionにおいても、関係者が参列してテープカットが行われました。

ショーケースは会場周辺で実施された3つのデモンストレーションで構成されていました。デモ1では会場周辺を巡る1時間半程度のバスツアーで、車載機器あるいはモバイル機器へのリアルタイム情報提供のデモンストレーションが行われました。デモ2では会場周辺の路上において、バスロケーションシステムやRF-IDを使用した身障者移動支援システムのデモンストレーションが行われました。デモ3では、会場前において電動車両のデモンストレーションが行われました。

テクニカルビジットでは、タクシープロープシステム、交通管制センター、自動化が進んだ港湾物流などのITSシステムが紹介されました。



Japan Pavilion テープカット

なお、ポストコングレスツアーとして、当機構が支援している長崎EV & ITSプロジェクトや福岡のETCを利用したパーク&ライドシステムを視察するツアーが企画・実施されました。

2-5 閉会式



恒例のパッシング・ザ・グローブ

29日午後に行われた閉会式では、まず、今回の会議の優秀論文賞の表彰が行われました。優秀論文には48編、うち、日本からは6編が選ばれ、国際プログラム委員会共同議長のYoung-jun Moon氏と池内克史氏により代表者に表彰状が授与されました。

引き続きChullho Lieu組織委員長による今大会のテーマと成果の総括、次回以降の開催地である米国・オーランド（2011年）、オーストリア・ウィーン（2012年）、日本・東京（2013年）それぞれによるプロモーションビデオ上映を含むプレゼンテーションの後、最後に恒

例のパッシング・ザ・グローブが行われ地球儀を模した ITS 世界会議のシンボルが次回オランダ会議の組織委員長である Patrick McGowan 氏に手渡されました。

3 HIDO の活動

3-1 映像・パネルによる展示

当機構は、国土交通省道路局、NEXCO 3社、首都高速道路、阪神高速道路と共同で映像及びパネルを中心とする展示を行いました。なお展示ブースについては日本としての統一感を演出するため ITS Japan ほか各企業・団体と共同で「Japan Pavilion」を構成・運営しました。

3-2 情報発信活動

昨年のストックホルム会議と同様、26日の夕刻に「ミ



ミニシンポジウム風景

ニシンポジウム」を企画・開催しました。

ミニシンポジウムは、慶應義塾大学の川嶋弘尚教授をモデレーターに、US DOT・ITS Joint Program Office プロジェクトリーダーの Mike Schagrין 氏、ERTICO・CVIS プロジェクトコーディネーターの Paul Kompfner 氏、釜山会議国際プログラム委員会共同議長の Youngjun Moon 氏、および米国の ITS 施策に詳しい Bishop Consulting 社主の Richard Bishop 氏をゲストにお招きし、コメンテーターとして国土交通省道路局高度道路交通システム推進室の大庭孝之室長、中日本高速道路企画本部技術開発部の高橋秀喜専門主幹、および東日本高速道路本社技術部海外事業チームリーダーの藤野智幸氏に

ご参加いただいて開催しました。ご多忙中の中で時間を割いていただいたご参加の各氏には、各国・地域における ITS 展開についてご議論いただきました。諸行事が目白押しの中、相変わらず直前まで各種調整がつかず、集客や PR の面では依然として課題を残しましたが、今後の日本からの積極的な情報発信活動のきっかけになれば幸いです。

4 コラム

4-1 『PUSAN』か『BUSAN』か

かつて日本でも大ヒットした歌は『釜山港』を『PUSAN - HAN』と発音していましたが今次大会の英文名称は『BUSAN』。空港の行先表示や航空券の券面も「BUSAN」ですし、街中でも基本的に「BUSAN」です。

そこで少し調べてみると、2000年に韓国における英字表記に関する法律が変更となり、発音を英字に転写するルールが変更されたため、前記のヒット曲は元々が1970年代の歌なので、当然に『PUSAN』と歌われているわけです。実際の発音は「若干“PU”寄りの“BU”」ということですが…。

同様の例として『大邱 (TAEGU → DAEGU)』『大田 (TAEJON → DAEJEON)』『金浦 (KIMPO → GIMPO)』などがあるようですが、地名など公共標記については新ルールでの統一が図られたものの、人名を英字でどう綴るかについては個人に任されていて、同じ発音でもいろいろなバリエーションが存在するようです。

4-2 広安大橋 (冒頭写真)

高速鉄道 KTX などの発着する釜山駅や、博多港や下関港からの高速船やフェリーなどの発着する釜山港を中心とする従来の市街地と、発展著しい海雲台・センタム地区 (BEXCO もこのエリアにある) を結ぶ、総延長 7,420m、4 車線 × 2 層構造の海上橋梁で、主橋梁部は延長 900m、中央支間長 500m の吊橋となっています。主橋梁部は海雲台地区と並ぶ釜山有数の海水浴場である広安里海岸 (延長約 1.4km) のすぐ沖を横切っているため、夜間にはライトアップが施され、海水浴シーズン以外は閑散としていた周辺地区に活気をもたらしました。